

日本語母語話者における 「受動動詞＋テアル」構文の選好度分析^{*} －「受動動詞＋テイル・他動詞＋テアル・自動詞＋テイル」構文との 比較分析を通じて－

裴銀貞^{**}
ejbae111@bufs.ac.kr

<目次>

- | | |
|-------------------|---------------|
| 1. はじめに | 3.2. 調査の結果 |
| 2. 先行研究の検討及び問題の提起 | 3.2.1 Aタイプの場合 |
| 2.1 先行研究の検討 | 3.2.2 Bタイプの場合 |
| 2.2 問題の提起 | 3.2.3 Cタイプの場合 |
| 3. 選好度の調査 | 4. まとめ |
| 3.1. 調査の概要 | |

主題語: 結果相(resultative aspect), 受動動詞(passive verb), 選好度(Preference), 位置(location), 存在(existence),
対象変化動詞(A verb with a change of object), 配置動詞(A Verb with indicating placement), 対象非変化
動詞(A verb with a unchanged object)

1. はじめに

本研究では、結果相のアスペクト表現である「受動動詞＋テアル」・「他動詞＋テアル」・「受動動詞＋テイル」・「自動詞＋テイル」構文との比較分析を通じ、日本語母語話者における「受動動詞＋テアル」文の選好度はいかに現れるのかについて考察する。

結果持続の意味合いを表すこれらの四つの構文は次のような形で実例で用いられており、先行研究では、「他動詞＋テアル」と「自動詞＋テイル」構文との比較分析、「他動詞＋テアル」と「受動動詞＋テイル」の比較分析の形が主に注目されてきた。

^{*} 이 논문은 2019년 대한민국 교육부와 한국연구재단의 지원을 받아 수행된 연구임
(2019S1A5A2A01041435)

^{**}釜山外国語大学校 日本語創意融合学部 教授

- (1) 家の郵便受けに嵯峨さんの覚え書きが入れられてあった時には、咄嗟に国府さんの仕業だと分かって、もう殺すほかはないと決断したらしい。(写楽殺人 1983)

:「受動動詞+テアル」文

- (2) 下の金庫には、重要書類と相当額の金とが納めてあり、火の中を無理に取りに行こうと思えば、行けるかも知れない状況であったので…。(之)

:「他動詞+テアル」文

- (3) スルタンの寝室には、しばらく前から、特別につくらせた低い大きな机卓がおかれている。その上には、昼も夜も、数枚の図面が広げられたままだった。(コンス)

:「受動動詞+テイル」文

- (4) そこには、雨あがりのあとに歩いてつけた足跡がはっきり残っていた。(孤独)

:「自動詞+テイル」文

結果相のアスペクト表現であるこれらの複数の表現のうち、従来、あまり研究されてこなかった構文は例文(1)のような「受動動詞+テアル」文である。この構文は、従来、不自然で落ち着きが悪い表現という認識が強かったため、他の構文とは違って研究の対象として注目されてこなかった。

しかし、実例を見てみると、数多くの「受動動詞+テアル」文が自然な形で用いられていることが確認できる。特に問題として指摘できるのは、多数の韓国人日本語学習者がこの構文を「他動詞+テアル」構文、あるいは「受動動詞+テイル」構文の間違った形として認識していたり、誤用であると勘違いをしていることである。

実例で自然な形で用いられ得る構文であるにもかかわらず、学習者がこのような間違った認識を持っていることは是正されるべきであり、このような意味でも「受動動詞+テアル」構文の研究はより詳細に行われる必要がある。特に、複数存在する結果を表すアスペクト構文のうち、「受動動詞+テアル」構文はどのように位置づけできるのかを明確にすることは、日本語教育の現場で特に誤用が多く発生する結果相のアスペクト構文の指導の側面でも、大きな役割を果たすと考えられる。

そこで、筆者は裴(2018)(2019a)(2019b)などを通じ、「受動動詞+テアル」構文の意味特徴の分析は勿論、日本語母語話者における該当構文の認識度の調査、また、その結果を韓国人日本語学習者と比較する考察を行うなど、「受動動詞+テアル」構文のアイデンティティを明確にするための試みを続けてきた。本稿ではその続きとして、日本語母語話者における「受動動詞+テアル」構文の選好度はどのように現れるのかに注目したい。すなわち、日本語母語話者は「受動動詞+テアル」構文の使用をどのくらい自然であると認識しており、

好むのか、また、このような特徴は「受動動詞+テアル」構文の三つの用法に同様に見られるのかを、その他の結果相のアスペクト表現と比較しながら考察していくことにする。

2. 先行研究の検討及び問題の提起

2.1 先行研究の検討

前節でも取り上げたように、従来「受動動詞+テアル」構文は注目の対象とされてこなかった分、関連の先行研究も数少なく、益岡(1984)、森田(1994)、森(2001)などが挙げられるくらいである。しかも、「受動動詞+テアル」構文を他の結果相のアスペクト表現と比較分析した形の研究は管見の限り見当たらない。

ここでは、上記の先行研究の中でも特に「受動動詞+テアル」構文のみを考察対象として絞り、本格的な研究を行っている森(2001)と、裴(2018)(2019b)の内容を概観し、本稿ではどのような形で先行研究の内容を補い、発展させるのかについて述べる。

まず、森(2001)を見てみたい。森(2001)は「受動動詞+テアル」構文を単独に考察の対象とし、深度深く考察しようとしたほぼ初めての研究であると言える。従来、益岡(1984)などの先行研究で「行為の結果もたらされる、ある場所での対象の存在を描写するタイプの文」を示す「A-1型」テアル文((例) 鞆が置いてある、荷物が乗せてあるなど)に限り、「受動動詞+テアル」型をとることが可能であると主張されてきた。氏は、このような益岡(1984)の主張を検証しつつ、「受動動詞+テアル」構文の成立条件は何なのかについて考察を行った¹⁾。

1) 益岡(1984)では、「テアル」構文を次のように四つのタイプに分類しており、このうち、A-1型に限り、受動動詞+テイル型に変えることが可能であると指摘している。

A-1型: 行為の結果もたらされる、ある場所での対象の存在を描写するタイプの文

(例) 鞆が置いてある、荷物が乗せてある など

A-2型: 行為の結果もたらされる、受動者の状態が目に見える形で存続していることを描写するタイプの文

(例) 石が磨いてある、紙が折ってある など

B-1型: 行為の結果もたらされる事態が基準時において引き続き存在しているという「結果の事態の継続性」の意味を表すタイプの文

(例) 部屋を確保してある 荷物をホテルに残してある など

B-2型: 単に、行為の結果が基準時において何らかの有効性を示す文

(例) 予約は入れている、準備はしてある など

その結果、氏は「A-1型」テアル文に限らず、「~テアル」の「アル」が<存在>として解釈されさえすれば、「受動動詞+テアル」構文として出現できると主張している。

しかし、実際「受動動詞+テアル」構文には幾つかの下位タイプが存在しており、それぞれのタイプは<存在という意味合いの有無>といった単一の基準に当てはまらない場合もある。それにもかかわらず、氏はその単一の基準だけで「受動動詞+テアル」構文の成立をすべて説明しようとしたため、主張に見直しの余地が提起される。先行研究でも数回指摘されているように、「受動動詞+テアル」構文がある位置における対象名詞の存在を強調する形でよく用いられるということは事実であるものの、この<存在>というキーワードが、「受動動詞+テアル」構文成立の必須条件とは言えないからである。

一方、このような森(2001)の問題点を補うため、裊(2018)では、実例で用いられている「受動動詞+テアル」構文を対象に、その意味用法を三つのタイプに洗い直し²⁾、それぞれどのような出現様相を見せているのかについて考察した。裊(2018)では「受動動詞+テアル」構文すべてに当てはまる成立条件の一般化は難しいことを認めた上で、「受動動詞+テアル」構文の各下位タイプそれぞれがどのような出現様相を見せているのか、どのようなタイプで出現しやすいのかなど、各タイプごとに見られる出現上の特徴を考察した。

その結果、「受動動詞+テアル」構文は「タイプAがもっとも多く、その次はタイプB、タイプCの順番で用いられやすい、多くの例文が位置節を伴う形で用いられており、タイプAがもっとも多く、その次はタイプB、タイプCの順番である、全体の90%を越える例文が物名詞を主語としており、物名詞を主語とする傾向は顕著であるものの、受動構造をとる「能動動詞+テアル」構文には見えない、抽象名詞や人名詞主語の構文も許容される、「受動動詞+テアル」構文の前後に特定の結果相表現があり、繰り返しを避ける目的で「受動動詞+テアル」構文が用いられているのではないという結論が得られた。

次に、裊(2019b)では、不自然で落ち着きが悪いとされている「受動動詞+テアル」構文を

- 2) 「Aタイプ」: 行為の結果もたらされる、ある場所での受動者・対象の存在を描写するタイプの文<益岡(1984)、森(2001)における「A-1型」に当たるタイプ>

[例] 円の外側には百目ろうそくが何本も置かれてある。

「Bタイプ」: 行為の結果もたらされる、受動者・対象の状態が目に見える形で存続していることを描写するタイプの文<益岡(1984)、森(2001)における「A-2型」に当たるタイプ>

[例] 目のやり場に彼はこまり、瞳を彼女の横へ向けて、たたまれてあるスカートや下着、その上に重ねられたネックレスやイヤリングを見下ろした。

「Cタイプ」: 行為の結果もたらされる、受動者・対象の状態が目に見えない形で持続していることを表すタイプの文

[例] しかしさすが元委員長のI氏のメニューだけあってよく考えられてあり、参考になる 点が多い。

実例では多数見掛けしているが、実際、日本語母語話者はこれらの「受動動詞+テアル」構文の自然さを如何に判断しているのかについて注目した。また、その自然さの判断の結果を、韓国人日本語学習者と比較し、両言語において「受動動詞+テアル」構文の自然さの判断がどのように異なっているのかについて考察を行った。その結果、日本語母語話者の半数以上が「受動動詞+テアル」構文の使用に違和感を持っておらず、自然であると判断したのに対し、韓国人日本語学習者は、該当構文を不自然であると認識しやすい傾向があることが確認された。また、日・韓両国において自然であると判断される「受動動詞+テアル」構文の下位タイプや共起する動詞類もお互い異なっていることがわかった。特に、韓国人日本語学習者の間に、「受動動詞+テアル」構文の自然さに対する認識度にかかなりの違いが見られ、日本語学専攻者の場合、該当構文を違和感があつて、使つてはいけない非文として認識している割合が高いこともあわせて確認できた。

2.2 問題の提起

以上、「受動動詞+テアル」構文に関する主な先行研究の内容を概観してみたが、その結果、「受動動詞+テアル」構文のもっとも典型的な形はAタイプであり、＜対象名詞の、ある場所における存在の強調＞が主な用法であることがわかった。また、日本語母語話者を対象とした自然さの判断の結果を見た結果、殆んど日本語母語話者がこの構文に対し、強い違和感を持っていないことが確認された。

以上のことを確認した上で、本稿では、次のような項目について検証してみたい。それは、実際、結果相を表す複数のアスペクト表現(「他動詞+テアル(例：ドアが開けてある)」、「受動動詞+テイル(例：ドアが開けられている)」、「自動詞+テイル(例：ドアが開いている)」)といっしょに「受動動詞+テアル」構文が提示された際、日本語母語話者は該当構文をどのくらい好むのか、ということである。先行研究を通じ、「受動動詞+テアル」構文すべてが、一律に違和感を齎すような不自然な表現ではないことは確認されたが、実際、複数の結果相表現と共に提示された時でも、同じような選好度を見せるのかは検証されていない。

そこで本稿では、複数の結果相のアスペクト表現が用いられ得る環境の中で、日本語母語話者はどのくらい「受動動詞+テアル」構文を好んで用いているのかを調べ、「受動動詞+テアル」構文における日本語母語話者の選好度を明確にしたい。この過程を通じ、裴(2018)(2019a)(2019b)では明らかにされなかった、「受動動詞+テアル」構文と他のアスペク

ト表現との比較分析が可能となり、結果持続を表す複数の表現における、「受動動詞+テアル」構文が位置づけがより明確になると判断している。

3. 選好度の調査

3.1 調査の概要

本研究では、以下のような二種類の設問調査(設問1、設問2)を行い、複数存在している結果相のアスペクト表現のうち「受動動詞+テアル」構文はどれくらいの好まれる表現なのかについて調べることにする。

<設問1の調査方法>

日本語母語話者に「受動動詞+テアル」型が含まれている文を提示した後、「受動動詞+テアル」文そのままの使用を好むのか、それとも「他動詞+テアル」型、「受動動詞+テイル」型など、他の結果相表現に置き換えることを好むのかを調査。

■ 実際の設問の例

前後文脈をよくお読みになった上で、下線がひいてある表現の自然さを判断してください。もし、不自然であると判断された際、より自然な表現を選び、()の中にチェックしてください。

1) 小さな看板がたったひとつあるだけだ。そこには大村益次郎が何年に来て、うんぬんと 書かれてあった。

a. 不自然()

b. やや不自然()

c. 完全に自然ではないが、使うのに問題はない()

d. 自然()

→ a-cと判断された場合、より自然な表現は(()書いてあった / ()書かれていた)です。

<設問2の調査方法>

実際、「受動動詞+テアル」型で用いられている实例を持ってきて、「受動動詞+テアル」型の部分を空欄にした後、日本語母語話者がその空欄を、複数存在し得る結果相のアスペクト表現のうち、どれを用いて完成させるのかを調査。

■ 実際の設問の例

前後文脈をよくお読みになった上で、()の中に入る、もっとも自然だと思われる表現を順番に選択してください。

- 1) 小さな看板がたったひとつあるだけだ。そこには大村益次郎が何年に来て、うんぬんと
()。
- a. 書いてあった b. 書かれてあった c. 書かれていた
- [自然な順番 : () > () > ()]

ちなみに例文の収集は、KOTONOHA「現代日本語書き言葉均衡コーパス(以下、BCCW)で用いられている「受動動詞+テアル」の実例を対象とした。また、収集された例文を、裴(2018)の基準によりA、B、Cタイプに3分類³⁾、三つのタイプごとに15例から20例のサンプルの選びだし、総48例をまとめて調査対象として用いた。設問1と設問2は異なる日本語母語話者を対象に行われ、設問1は20人、設問2は18人の日本語母語話者が判断対象となった。一方、「受動動詞+テアル」型の選好度を考察するにあたり、上記のように二種類の設問を行ったのは、次のような理由からである。

<設問1>は、完成された形の「受動動詞+テアル」文を日本語母語話者に提示し、もし、不自然だと感じられたら他の結果相表現に変えてください、とのことであるため、すでに提示されている原文の「受動動詞+テアル」文に強い違和感がない限り、日本語母語話者はあえて他の結果相表現を選ぼうとしない可能性がある。しかし、<設問2>は、原文は「受動動詞+テアル」文であるものの、そのスペースが空欄になった形で提示されるため、複数の結果相表現のうち、もっとも自然であると思われる表現を、より自由に選ぶことが可能である。

すなわち、この二つの設問を両方行うことで、複数存在する結果相の表現のうち、日本語母語話者がもっとも好む表現が何なのかをより多角的に、また客観的に判断できると思い、本稿では二回の設問調査を行うことにしたのである。

それでは以下、設問1と設問2の結果を確認することにするが、上述した三つのタイプごとに分けて、その結果を見てみたい。

3.2 調査の結果

3.2.1 Aタイプの場合

Aタイプの例文は、行為の結果もたらされる、ある場所での受動者・対象の存在を描写す

3) 脚注3を参照されたい。

るタイプであるため、「受動動詞+テアル」構文の、もっとも典型的で代表的な用法の例文であると言える。まず、＜設問1＞の結果を見てみよう。

【表1】 ＜設問1＞の結果：Aタイプの場合（単位：人数）

例文 番号	共起 動詞	受動動詞 +テアル	他動詞+ テアル	受動動詞 +テイル	自動詞+ テイル	無応答	合計
1	書く	9	6	4	0	1	20
2	書く	3	2	14	0	1	20
3	書く	13	3	3	0	1	20
4	置く	10	2	6	0	2	20
5	置く	5	8	6	0	1	20
6	置く	8	3	8	0	1	20
7	囲む	0	0	20	0	0	20
8	囲む	5	0	14	0	1	20
9	敷く	9	3	7	0	1	20
10	敷く	7	1	10	0	2	20
11	敷く	12	2	6	0	0	20
12	飾る	5	5	10	0	0	20
13	飾る	6	3	11	0	0	20
14	飾る	6	1	11	0	2	20
15	積る	13	0	7	0	0	20
16	積る	11	1	8	0	0	20
17	刻む	7	2	10	0	1	20
18	並べる	11	1	8	0	0	20
19	並べる	9	1	9	0	1	20
20	並べる	12	1	7	0	0	20
21	配置する	6	7	7	0	0	20
22	出す	4	7	9	0	0	20
23	出す	7	2	8	2	1	20
24	隔離する	3	1	16	0	0	20
39	認める	3	2	13	0	1	20

調査対象となった総48例のうち、タイプAに属する例文は25例あり、【表1】のもっとも左側にある数字は、調査対象となった例文の番号を意味する。また「共起動詞」というのは、各例文の述語として用いられている動詞を意味する。

次に「受動動詞+テアル」から「無応答」までの欄に書いてある数字は、各例文の述部として適合であると判断された表現の数を意味する。例えば、例文番号[1]は、共起動詞として「書く」が用いられている例文であり、「書かれてある」といった原文そのままの形で充分と判断した人が20人中9人、「書いてある」に変えるべきであると判断した人が6人、「書かれている」に変えるべき、と答えた人が4人であることを意味する。ちなみに「書く」は無対他動詞であり、対応する「自動詞+テイル」構文自体は存在しないため、「自動詞+テイル」の項目は「0」になっている。参考のため、例文番号[2]と[3]の例文を以下に取り上げておく。

(5) [例文番号2] 誰かに手紙を書いているような感じで、この詩は書かれてあります。もちろん、相手に届くあてのない手紙であります。

(6) [例文番号3] フリードリンクの、紅茶が気に入ってます。なぜなら、ちゃんと紅茶葉が置かれてあつて、ポットにお湯入れて飲めるから。

再び、【表1】に戻り、その結果を見てみると、他の結果相表現に変える必要がなく、原文である「受動動詞+テアル」型をそのまま維持していいという答えがもっとも多かった例文は、例文番号[1][3][4][6][9][11][15]などを含め、11例存在していた。Aタイプ総25例のうち、11例(44%)において、「受動動詞+テアル型」がもっとも自然であるという判断を受けたわけである。「受動動詞+テアル」構文の中で、もっとも典型的な用法であると言えるAタイプのわりには、「受動動詞+テアル型」の選択率は過半数に満たず、低いという意外な結果を見せている。

ところが実際、「受動動詞+テアル型」のもっとも典型的なタイプといえば、Aタイプの中でも、下記例文(7)のように、受動者と対象の存在が<場所の二格名詞>を伴い、文の上、顕在しているタイプであると言える。

(7) [例文番号1] 小さな看板がたったひとつあるだけだ。そこには大村益次郎が何年に来て、うんぬんと書かれてある。

それでは、Aタイプの中でも、上記例文(7)のように、場所を表す二格名詞が伴われており、もっとも典型的な「受動動詞+テアル」構文と言える例文にはどのような結果が見られたのかに注目してみよう。ちなみに、上述した【表1】の例文のうち、文の上、場所を表す二格名詞が伴われている例文がこの場合に当たるのであるが、結果をまとめると、下記の【表2】のようである。

【表2】＜設問1＞の結果：場所を表す二格名詞が伴われるAタイプの「受動動詞+テアル」構文
(単位：人数)

例文 番号	동사	受動動詞+ テアル	他動詞+ テアル	受動動詞+ テイル	自動詞+ テイル	無応答	合計
1	書く	9	6	4	0	1	20
3	書く	13	3	3	0	1	20
4	置く	10	2	6	0	2	20
6	置く	8	3	8	0	1	20
9	敷く	9	3	7	0	1	20
11	敷く	12	2	6	0	0	20
13	飾る	6	3	11	0	0	20
16	積る	11	1	8	0	0	20
17	刻む	7	2	10	0	1	20
19	並べる	9	1	9	0	1	20
20	並べる	12	1	7	0	0	20
23	出す	7	2	8	2	1	20
39	認める	3	2	13	0	2	20

場所を表す二格名詞が伴われているAタイプの例文はAタイプ25例のうち、上記の13例存在していたが、調査の結果を見ると、例文[13][17][20][23]を除いた残りの9例の場合、原文の形である「受動動詞+テアル」型そのままがいいという答えがもっとも多いことがわかる。これは、場所の二格名詞が共起するAタイプの例文13例のうち、69.2%に当たる結果であり、約70%に達する日本人母語話者が「受動動詞+テアル」型を他の結果相表現より自然であると判断したということになる。

これは言い換えると、「受動動詞+テアル」構文が持ち得る、もっとも典型的な属性がそろえられた形で該当例文が提示されれば、日本語母語話者の大半は、該当の例文に違和感を感じず、好んでいることを意味する。特に、例文[3][4][11][15][16][18]を見ると、20人中10人以上の人が、他の結果相表現より「受動動詞+テアル」構文が自然であると答えており、圧倒的な選好度を見せている。

すなわち、このような結果は表(2019a)で指摘された通り、「受動動詞+テアル」構文のもっとも典型的な用法は＜特定位置における対象名詞の存在＞であることを改めて確認させてくれる結果であると言える。特に、位置関係が二格名詞として顕在化していない例文に比べ、二格名詞が共起しているこれらの例文において「受動動詞+テアル」構文の選好度

が高いということは、＜位置関係の強調＞の有無が「受動動詞+テアル」構文の自然さの判断、及び、好みの判断においてかなりの影響を与えていることを意味する。

ところが、ここで興味深い事実も確認された。それは、このような傾向が次に行われた＜設問2＞では同様に見られないとのことである。＜設問2＞は、＜設問1＞とは違って、当該の例文の述部の個所を空欄にし、自然であると思われる結果相の表現を順番に選んで書くように、とのことであった。ところが、＜設問2＞の結果は上記の＜設問1＞の結果とかなり異なっており興味深い。

＜設問2＞では、空欄に入る複数の結果相の表現のうち、もっとも自然である判断された順番に、3点、2点、1点をつけ、平均点を出した形で選好度を評価した。ちなみに、述語として有対他動詞が用いられる場合、結果相の表現の選択肢として「自動詞+ている」文も追加されるため、そのような例文に限り、自然さの順番は、4点、3点、2点、1点といった四つの選択地の点数を平均する形をとる。すなわち、「自動詞+テイル」構文が選択地として加わる例文の場合は、4点に近いほど選好度が高い表現となり、自動詞+テイル構文が選択地として含まれない例文の場合は、3点に近いほど選好度が高い表現となる。以下、場所を表す二格名詞が共起するAタイプ13例の選好度の平均点をまとめておく。

【表3】＜設問2＞：場所を表す二格名詞が共起するAタイプ13例の選好度の平均点

結果相構文 例文番号	受動動詞+ テアル	他動詞+ テアル	受動動詞+ テイル	自動詞+ テイル
1	1.72	1.89	2.39	-
3	1.78	1.72	2.5	-
4	1.83	1.67	2.5	-
6	1.56	1.94	2.5	-
9	1.61	1.89	2.5	-
11	1.6	2.2	2.3	-
13	1.44	2	2.56	-
16	1.3	2.5	2.2	-
17	1.5	1.67	2.83	-
19	1.83	1.89	3.22	3.06
20	2	2.17	3.11	2.72
23	1.94	2.5	3	2.56
39	1.72	1.56	2.72	-
平均点	1.67 (3位)	1.97 (2位)	2.64 (1位)	2.78 ⁴⁾

【表3】の結果を見ると、二格名詞が共起するAタイプ全てにおいて、もっとも選好度の点数が高いのは「受動動詞+テイル」構文であることが確認できる。これは言い換えれば、「受動動詞+テアル」構文が許容されるもっとも典型的な環境がそろえられたにもかかわらず日本語母語話者は「受動動詞+テアル」構文を好まず、「受動動詞+テイル」を選択していたことを意味する。

【表3】の各項目の数値を見ると、二格名詞が共起するAタイプの例文13例において、「受動動詞+テイル」構文の選好度の平均点がもっとも高く、その次が「他動詞+テアル」構文であり、「受動動詞+テアル」構文の選好度の平均点はもっとも低いことが確認できる。＜設問1＞の結果、位置を表す二格名詞が共起するAタイプ総13例のうち約70%の例文が、「受動動詞+テアル」構文として用いられることに違和感がなく、あえて他の結果相表現に変える必要性がない、という結果を見せたため、真逆の結果であると言える。

このような真逆の結果が見られたのは、次のことを意味する。それは、特定の位置からの対象名詞の存在を強調する用法をもっとも典型的な用法とする「受動動詞+テアル」構文は、日本語母語話者にとって自然な、言い換えれば違和感とは与えない表現かもしれないが、だからといって好まれる表現とも言えない、ということである。

すなわち、「受動動詞+テアル」構文が自然な形で用いられる環境のもとであっても、複数の結果相表現が同時に提示された場合、日本語母語話者はあえて「受動動詞+テアル」構文を一順位として選ぶとはしない、ということなのである。ちなみに、調査の結果から見れば、「受動動詞+テアル」構文がもっとも自然な形で用いられ得る環境が整えられた際、日本語母語話者がもっとも好んで用いている構文は、「受動動詞+テイル」型であることがわかる。

裴(2008)では「他動詞+テアル」構文と「受動動詞+テイル」構文を比較分析し、両用法の違いについて分析を行ったが、その結果を見ると、「他動詞+テアル」構文が用いられる環境と「受動動詞+テイル」構文が用いられる環境にはかなりの差が存在しており、制限が比較的少なく、より幅広く用いられ得る結果相の表現は「受動動詞+テイル」構文であることが報告されている。「他動詞+テアル」構文の場合、動作主の行為における意図性が必要となったり、「受動動詞+テイル」構文と違って、目に見えない対象名詞の結果状態は表せない特徴があるなど、使用上の制限が存在する表現だからである。

一方、今回の調査の結果から、「受動動詞+テイル」構文は「他動詞+テアル」構文のみで

4) 「自動詞+テイル」構文は有対他動詞を述語とする三つの例文のみが対象となっているため、全体例文の選好度の順位からは除いた。

はなく「受動動詞+テアル」構文が同時に用いられ得る環境の中でも、もっとも好まれる結果相の表現になり得ることが証明されたわけである。つまり、結果相を表す複数のアスペクト表現の中でも特に「受動動詞+テイル」構文は、もっとも幅広い用法がカバーできる無標の表現であると言える。

また、幾つかの先行研究で、「受動動詞+テアル」構文が許容される条件は何なのか、また、自然さを高める要因は何なのかについてはその内容が一部考察されてきた。しかし、複数存在する結果相のアスペクト表現のうち、「受動動詞+テアル」構文はどのくらい好まれるのかについて考察した研究はなかった。本研究を通じ、「受動動詞+テアル」構文は、対象名詞のある位置における存在を強調する場面で自然な形で用いられ得るものの、選好度の側面においては複数の結果相の表現のうち、もっとも好まれない表現であることが明確になったと言える。

3.2.2 Bタイプの場合

裴(2018)でも確認できたように、Bタイプの例文は<主語となる対象名詞の、変化を受けた後の持続>を表すという点で、「受動動詞+テアル」構文の典型的な用法とは言いがたいタイプである。「受動動詞+テアル」構文の典型的な用法は、上述してきたように、<対象名詞のある場所における位置・存在の強調>だからである。実際、上記のことは次の<設問1>の結果からも確認できる。

今回の調査で対象となったBタイプの例文は12例あったが、下記の【表4】を見ると、原文の形である「受動動詞+テアル」構文のままでいい、という答えが一番多かったのは例文番号[29]の一例に過ぎず、その他の例文はいずれも「受動動詞+テイル」構文がもっとも自然である、という答えに集中していたことがわかる。

【表4】<設問1>の結果：Bタイプの「受動動詞+テアル」構文 (単位：人数)

例文番号	동사	受動動詞+テアル	他動詞+テアル	受動動詞+テイル	自動詞+テイル	無応答	合計
25	造る	4	0	15	0	1	20
26	作る	8	0	12	0	0	20
27	切る	3	1	12	2	2	20
28	折り曲げる	2	3	12	0	3	20
29	刷る	6	4	6	0	4	20
30	広げる	6	3	11	0	0	20

31	カットする	3	2	15	0	0	20
32	遺す	5	2	9	2	2	20
33	合葬する	2	3	12	0	3	20
34	警護する	2	0	18	0	0	20
35	考える	4	0	16	0	0	20
38	予算する	3	7	10	0	0	20

一方、これらのBタイプの例文は12例のうち、下記の例文番号[26]、[29]、[30]の場合、位置を表す二格名詞が伴われているにもかかわらず、日本語母語話者はこれら五つの例文全てに、「受動動詞+テイル」構文の形がもっとも自然であるという答えが出していることがわかる。

- (8) [例文番号26] 人は彼の手を引いて別の壁際に連れて行くのでした。その壁にも、例の覗き穴が巧妙に作られてありました。
- (9) [例文番号29] 「東都企業株式会社営業グループ、チーフ」という肩書の下に『森戸邦夫』と名前が刷られてあった。
- (10) [例文番号30] 日没の薄明かりの中、彼女の前のテーブルには新聞が広げられてあった。

前節でも確認したように、Aタイプの場合、位置の二格名詞が伴われていれば自然さも上がる傾向を見せていた。しかし、上記の結果を見ると、Bタイプの場合はAタイプと同じような特徴は持っていないようである。

すなわちこれは、Aタイプのように、述語として配置・存在を表す動詞が用いられていない限り、位置を表す二格名詞がいくら伴われていても、日本語母語話者は「受動動詞+テアル」構文の自然さが上がるとは判断していないことを意味する。

次に、〈設問2〉の結果を見てみたいが、〈設問2〉の結果からも、Bタイプの「受動動詞+テアル」構文が日本語母語話者にとってあまり好まれないという傾向が再確認できる。

【表5】〈設問2〉：Bタイプの選好度の平均点

結果相構文 例文番号	受動動詞+ テアル	他動詞+ テアル	受動動詞+ テイル	自動詞+ テイル
25	1.39	1.72	2.89	-
26	1.61	1.61	2.78	-

27	2.33	2.44	3.11	2.11
28	1.89	2.5	3.22	-
29	1.5	1.83	2.67	2.67
30	2.11	2.78	3.72	1.39
31	1.22	2	2.78	-
32	2.06	1.67	3.44	2.78
33	1.83	1.44	2.72	-
34	2	0.94	3	-
35	1.78	1.22	3.0	-
38	1.89	1.78	2.33	-
平均点	1.8 (3位)	1.83 (2位)	3.03 (1位)	2.24

【表5】を見ると、Bタイプの例文の場合、日本語母語話者は、複数の結果相表現のうち、「受動動詞+テイル」構文をもっとも好んでいることが確認できる。「受動動詞+テイル」構文の選好度の平均点は3.03点として一番高く、「受動動詞+テアル」構文は、1.8を示し、前節のAタイプの結果に続き、最下位を記録していることがわかる。

すなわち、対象変化の結果持続を表すBタイプの「受動動詞+テアル」構文の場合は、その使用においても違和感のある表現である上、選好度の側面においても他の結果相表現より劣る結果を見せていることがわかる。これは、二格名詞が伴われる形で用いられるAタイプの「受動動詞+テアル」構文が違和感なく用いられているものの、他の結果相表現に比べ、好まれなかったこととはかなり異なる結果であると言える。

3.2.3 Cタイプの場合

裴(2018)によると、Cタイプの「受動動詞+テアル」構文は、「他動詞+テアル」構文としては表せない<目に見えない抽象物の結果持続>を表せるという特徴があった。すなわち、Cタイプの「受動動詞+テアル」構文は、「他動詞+テアル」構文とは完全に区別できる、「受動動詞+テアル」構文ならではの独特な用法なのである。

しかし、今回の調査結果である以下の【表6】を見ると、Cタイプの「受動動詞+テアル」構文の場合、他の結果相表現に変えるべきだ、という答えが圧倒的に多いことがわかる。

【表6】＜設問1＞の結果： Cタイプの「受動動詞+テアル」構文 (単位：人数)

例文 番号	동사	受動動詞 +テアル	他動詞+ テアル	受動動詞 +テイル	自動詞 +テイル	無応答	合計
36	計る	3	0	17	0	0	20
37	恵まれる	2	0	17	0	1	20
41	働きかける	1	3	16	0	0	20
42	握る	4	0	16	0	0	20
43	張り巡らす	3	1	16	0	0	20
44	祀る	6	0	13	0	1	20
45	与える	6	0	14	0	0	20
46	切り離す	5	1	14	0	0	20
47	秘める	1	0	19	0	0	20
48	隔てる	4	0	14	0	2	20

【表6】の結果を見ると、調査対象となった10例のCタイプの「受動動詞+テアル」構文全てにおいて「受動動詞+テイル」構文に変えるべきだ、という答えがもっとも多いことが確認できる。このような傾向は、以下の＜設問2＞にも共通に現れる。

【表7】＜設問2＞：Cタイプの選好度の平均点

結果相構文 例文番号	受動動詞+ テアル	他動詞+ テアル	受動動詞+テ イル	自動詞+ テイル
36	1.5	1.72	2.78	-
37	1.22	0	1.78	-
41	1.67	1.61	2.67	-
42	1.89	1.06	3.0	-
43	1.78	1.44	2.78	-
44	1.83	1.44	2.72	-
45	2.11	2.11	2.89	-
46	2.67	1.39	2.11	2.11
47	1.61	1.5	2.89	-
48	1.94	1.06	2.94	-
平均点	1.82 (2位)	1.33 (3位)	2.66 (1位)	2.11

【表7】を見ると、Cタイプの「受動動詞+テアル」構文の場合、「受動動詞+テイル」構文がもっとも好まれ、平均点2.66点を示しているのに対し、「受動動詞+テアル」構文は、1.82点を示し、2位を記録していることがわかる。ちなみに、A、Bタイプの結果とは違って、「受動動詞+テアル」構文の選好度が最下位ではないことがわかる。

それは、Cタイプの「受動動詞+テアル」構文の場合、＜目に見えない対象名詞の結果持続＞を表しているため、「他動詞+テアル」構文が用いられるための環境自体になっていないことに理由がある。前節でも取り上げたように、「他動詞+テアル」構文は、主に目に見える対象名詞の結果持続を表しやすい特徴を持つ。そのため、Cタイプの例文の場合、「他動詞+テアル」構文の選好度がもっとも低くなり、相対的に「受動動詞+テアル」構文の点数が上がったと判断される。

以上、日本語母語話者を対象に「受動動詞+テアル」構文の選好度について、他の結果相表現と比べながら調査を行った。結果はタイプごとに異なる様相を見せており、分かりやすくまとめると、次のようである。

【表8】A、B、Cタイプにおける「受動動詞+テアル」構文の選好度

選好度の平均点	受動動詞+テアル	他動詞+テアル	受動動詞+テイル
Aタイプ	1.67 (3位)	1.97 (2位)	2.64 (1位)
Bタイプ	1.8 (3位)	1.83 (2位)	3.03 (1位)
Cタイプ	1.82 (2位)	1.33 (3位)	2.66 (1位)

4. まとめ

以上、複数存在する結果相のアスペクト表現のうち、「受動動詞+テアル」構文の選好度はどのように現れるのかを、その他の結果相のアスペクト表現と比較しながら考察してみた。その結果、タイプごとの相違点も存在しているものの、「受動動詞+テアル」構文が日本語母語話者にあまり好まれる表現ではないことは共通的に確認された。タイプごとの傾向をまとめると、次のようになる。

【表9】各タイプに見られる特徴のまとめ

タイプ	特徴
Aタイプ	場所を表す二格名詞が伴われた形で用いられることで、結果相のアスペクト表現としての違和感がより少なくなる。 選好度の点数が他の結果相表現に比べもっとも低く、好まれる表現とは言えない。
Bタイプ	Aタイプと違って、場所を表す二格名詞が伴われた形で用いられても、違和感のある結果相表現として認識されやすい。 選好度の点数は他の結果相表現に比べもっとも低く、好まれる表現とは言えない。
Cタイプ	違和感のある結果相表現として認識されている。 自然さの度合いはBタイプと同様に低く、違和感を与える表現であるが、目に見えない対象名詞の結果持続を表せるという該当構文ならではの特徴があり、選好度の点数は「他動詞+テアル」構文より高い。

但し、位置を表す二格名詞を伴い、Aタイプの形で用いられている「受動動詞+テアル」構文には興味深い傾向が観察された。それは、Aタイプの場合、提示された例文自体については、あえて他の結果相表現に変える必要性を感じない人が多かったことである。しかし、結果持続の表現が入る述部の部分を空欄にしておき、複数の結果相表現と同時に「受動動詞+テアル」構文も提示した際は、他の結果相表現が圧倒的に好まれる独特な様相を見せていた。これは、「受動動詞+テアル」構文のもっとも典型的な形をとっている場合、日本語母語話者は該当の例文を十分自然であるとは認識するものの、他の結果相の表現ほど好んではないことを意味する。

従来、日本語教育の現場で「受動動詞+テアル」構文は殆んど学習項目として取り扱われておらず、韓国人日本語学習者にとっては違和感が強く、場合によっても非文として認識している場合も多かった。実際、「受動動詞+テアル」構文が他の結果相表現に比べ、選好度の側面で多少落ちているものの、一律に不自然な構文として扱われる構文ではないことが本研究を通じ検証されただけに、今後日本語教育の現場でもこのような受動動詞+テアル」構文の特質が正しく学習される必要がある。

一方、今回、調査対象となった例文は無対他動詞の数が多く、「自動詞+テイル」構文に置き換えられる例文自体が少なかった。そのため、「受動動詞+テアル」構文と「自動詞+テイル」構文との選好度の比較は本格的に行われなかった。これは別稿を通じ、より詳しく考察していきたい。

【参考文献】

- 安藤節子(2012)「コーパスに見るテアル表現の意味用法と共起動詞-日本語教育/学習の観点から-」『桜美林言語教育論集』8、桜美林大学
- 李京保(2004)「シテアル形に関する一考察」『東京外国語大学日本研究教育年報』8、東京外国語大学日本過程、留学生課共編
- 李光秀(2001)「日本語「てある」文의 構造」『日語日文學研究』38、韓国日語日文学会
- 浦木貴和(2006)「テアル構文に関する考察」『日本語・日本文化研究』16、大阪外大日本語講座
- _____ (2010)「テ形節とスケール構造からみたテアル構文の意味分析」『日本語・日本文化研究』20、大阪外大日本語講座
- 呉幸栄(2012)「してある」と「しておく」の接近：《第2「してある」動詞》との対応を中心に」『日本文学研究』(51)、大東文化大学日文学会
- 神永正史(2008)「テアル構文の動詞構成：存在文との近さから」『筑波日本語研究』13、筑波大学大学院日本語学研究室
- 杉村 泰(1996)「形式と意味の研究-テアル構文の2種類」『日本語教育』91、日本語教育学会
- _____ (2002)「意志性のないテアル構文について」『言語文化論集』第XXV巻、1号
- 齋藤 茂(2009)「テアル構文と対象の格表示」『言語と文明』6、麗澤大学大学院言語教育研究科
- _____ (2010)「テアル構文と受動表現(ラレテイル)との使い分け-結果を基に動作が行われたと推論することによる制約-」『麗澤大学紀要』90、麗澤大学
- 鈴木泉子(2002)「テアル構文について-モノの存在と効果の存在-」『津田塾大学紀要』32
- _____ (2004)「格交替における意味の関与-テアル構文を足掛かりとして-」『津田塾大学紀要』36
- 張賢善(2010)「てある」文と「ておく」文の違いについて：文法構造の観点から」『言語・地域文化研究』16、東京外国語大学大学院
- 原沢伊都夫(2005)「テアルの意味分析-意図性の観点から-」『日本語文法』5:1、日本語文法学会
- 富田美知子(1993)「有対他動詞の自動詞表現と受身表現」『人文論究』56、北海道教育大学函館人文学会
- 福島建作(2007)『日本語のアスペクト体系の研究』ひつじ書房
- _____ (2009)「シテアル再考-他動性の観点から」『留学生教育』6、琉球大学留学生センター
- 裴銀貞(2008)「結果及び状態を表す「AガVテアル」文と「AガVラレテイル」文の比較分析」『日本語文学』39、日本語文學會
- _____ (2018)「結果を表す「受動動詞+テアル」構文の出現様相の分析」『日本近代学研究』60、日本近代学会
- _____ (2019a)「日本人母語話者における「受動動詞+テアル」構文の認識度について」『日本近代学研究』64、日本近代学会
- _____ (2019b)「日・韓両言語における「受動動詞+テアル」構文の認識度の違いについて」『日語日文學』82、大韓日語日文學會
- 原沢伊都夫(1998)「テアル形の意味-テイル形との関係において」『日本語教育』98、日本語教育学会
- _____ (2005)「テアルの意味分析-意図性の観点から-」『日本語文法』5:1
- 益岡隆志(1984)「一てある」構文の文法」『言語研究』86
- _____ (1987)「テアル表現の意味領域」、『命題の文法』くろしお出版
- 森 貞(2001)「他動詞受動形+テアル」構文について」『福井工業高等専門学校研究紀要』35、福井工業高等専門学校
- 森田良行(1994)「動詞の意味論的文法研究」明治書院
- 山崎 恵(1992)「結果相の表現に関する一考察-「ている」「てある」「られてある」「られている」-」『富山国際大学紀要』2、富山国際大学

安藤節子(2012)「コーパスに見るテアル表現の意味用法と共起動詞日本語教育/学習の観点」『桜美林言語教育論叢』(8)、桜美林大学言語教育研究所

논문투고일 : 2019년 12월 06일
심사개시일 : 2020년 01월 16일
1차 수정일 : 2020년 02월 02일
2차 수정일 : 2020년 02월 13일
게재확정일 : 2020년 02월 17일

＜要旨＞

日本語母語話者における「受動動詞+テアル」構文の選好度分析

－「受動動詞+テイル・他動詞+テアル・自動詞+テイル」構文との比較分析を通じて－

裴銀貞

本研究では、複数存在する結果相のアスペクト表現のうち、「受動動詞+テアル」構文の選好度はどのように現れるのかを、その他の結果相のアスペクト表現と比較しながら考察してみた。

その結果、Aタイプの場合、場所を表す二格名詞が伴われる場合、許容度が上がり、違和感の少ない表現として認識されるようになるものの、他の結果相表現と比べた場合、あまり好まれない表現という結果が出た。また、Bタイプの場合、二格名詞が伴われても自然さはあまり上がらず、違和感を感じる日本語母語話者が多いことが確認された。また、他の結果相表現に比べ、選好度の点数も低いことがわかり、自然さと選好度が共に低いタイプであることが確認できた。最後に、Cタイプの場合、自然さの度合いはBタイプと同様に低く、違和感を与える表現であるが、目に見えない対象名詞の結果持続を表せるという該当構文ならではの特徴があり、選好度の点数は「他動詞+テアル」構文より高いことがわかった。

A preference analysis of “passive verb +tearu” syntax in Japanese native speakers

－Through comparative analysis with “passive verb +tearu, transitive verb + tearu,
intransitive verb + teiru” syntax－

Bae, Eun-Jeong

In this study, I examined how the preference of the “passive verb+tearu” syntax. appears among the plural resultative aspect phase. As a result, in the case of the A type, when the place noun was accompanied, it showed the feature that tolerance increased. However, when compared with other resultative aspect phasee in a less preferred expression.

In the case of type B, it was confirmed that even if a place noun was accompanied, the naturalness did not increase, and many Japanese native speakers felt unnaturalness.

In addition, it was found that the score of the preference was lower than that of the other resultative aspect phase , and it was confirmed that both the nature and the preference were low.

Finally, in the case of the C type, the degree of naturalness is as low as the B type, and it was found that the expression gives unnaturalness. The c type has a feature that can express the persistence of invisible nouns, so, it has a higher selection score than the “transitive verb +tearu” syntax.